

日本子ども社会学会 第 29 回大会
研究発表Ⅱ-3【中学生・高校生の生活と文化Ⅱ】

入学者選抜と中学・高校時代の学びの関連
—JLSCP(パネル調査)データを用いた分析—

2023年6月3日(土)
J:COM ホルトホール大分

ベネッセ教育総合研究所
木村 治生

◆研究の目的

【2】

●研究の目的

大学入学者選抜方法と中学・高校時代の学びの関連を明らかにすることで、**入試改革が企図した効果を得られているか**を検討する。

★以下では、一般選抜を「一般」、学校推薦型選抜を「推薦」、総合型選抜を「総合」と略記する

●研究の背景

①入学者選抜の多様化→一般が減少し、推薦と総合が増加

【2000年→22年】一般65.8%→49.0%、推薦31.7%→36.2%、総合1.4%→13.5%

②「学力の3要素」の評価を強調する政策の流れ

【2000年】大学審議会答申「大学入試の改善について」、【2016年】高大接続システム改革会議「最終報告」→筆記試験以外で主体性や協働性などの多様な資質・能力を評価すべき

③推薦、総合の効果に対する疑い

●推薦は非エリート層の入学をさせるマス選抜の性格を持つ（中村，1996，2010）

●推薦は進路決定をしきれない生徒が利用（西丸，2015）

●大学ごとに行われている分析では肯定的評価と否定的評価が相半ば（木村，2021）

★高大接続システム改革会議「最終報告」では、推薦、総合について「学力不問と揶揄される状況が生じている」と指摘されている

◆本研究の特徴

【3】

●先行研究の状況

①選抜方法と大学入学後の学びの関連についての研究は多い

- 推薦、総合による入学者の成績は一般と変わらない（坂本，2014；森川ほか，2014；片瀬，2020など）
- 推薦、総合による入学者には優れた資質がみられる（倉元・大津，2011；中室ほか，2014；楠見ほか2016；木村ほか，2018；木村，2020aなど）

②中学・高校での学びとの関連を検討した研究は少ない

- 推薦、総合を希望する高校生の平均学習時間は短い、長い生徒もいる（加藤，2019）
- 推薦は定期テスト勉強の誘因になるが、日々の学習は促進しない（山村ほか，2019）
→選抜方法は「希望」であり、最終的な進路との関連をみていないなどの課題

③1時点の分析が多く、パネルデータを用いた研究は少ない

- 入学難易度が高い大学の総合選抜は多様な資質・能力の学生を選抜（木村，2020b）
→大学生の振り返り（後方視的）データでの分析にとどまる
- 国立大学の推薦、総合は成績優秀な学生を獲得できていない（中西，2017）
→サンプルサイズが小さい、大学入学者しか分析できていないなどの課題

●本研究の特徴

①中学・高校での学びと選抜方法の関連を検討

②卒業時点の進路が確定している対象を分析

③同一個人を追跡するパネルデータの分析

★データの希少性を生かした検討を行う

◆使用するデータ

【4】

- 東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同実施するパネル調査（Japanese Longitudinal Study of Children and Parents：JLSCP）
（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所，2020）

- 2種類のデータセットを使用

- ①毎年7-8月に行う「ベースサーベイ」

【調査対象】小1～高3の親子約21,000組（親子のダイアドデータ）

※本研究では2015年度と16年度に中1だった子どもを抽出

【調査内容】子ども：日ごろの生活や学習の様子、価値観・人間関係など

保護者：子どもの生活や学習へのかかわり、教育観、教育投資行動など

- ②高校卒業の3月に行う「卒業時サーベイ」

【調査対象】高3生（一部にそれ以外を含む）

※本研究では2020年度と21年度に高校を卒業した子ども1,885名を抽出

【調査内容】高校生活の様子、進路選択のプロセス、進路先、将来イメージなど

- 表1：サンプル数

	発送数	回収数(回収率)	大学 進学者数
2020年度卒業時サーベイ	1,449	991 (68.4%)	603
2021年度卒業時サーベイ	1,343	894 (66.6%)	648
合計	2,792	1,885(67.5%)	1,251

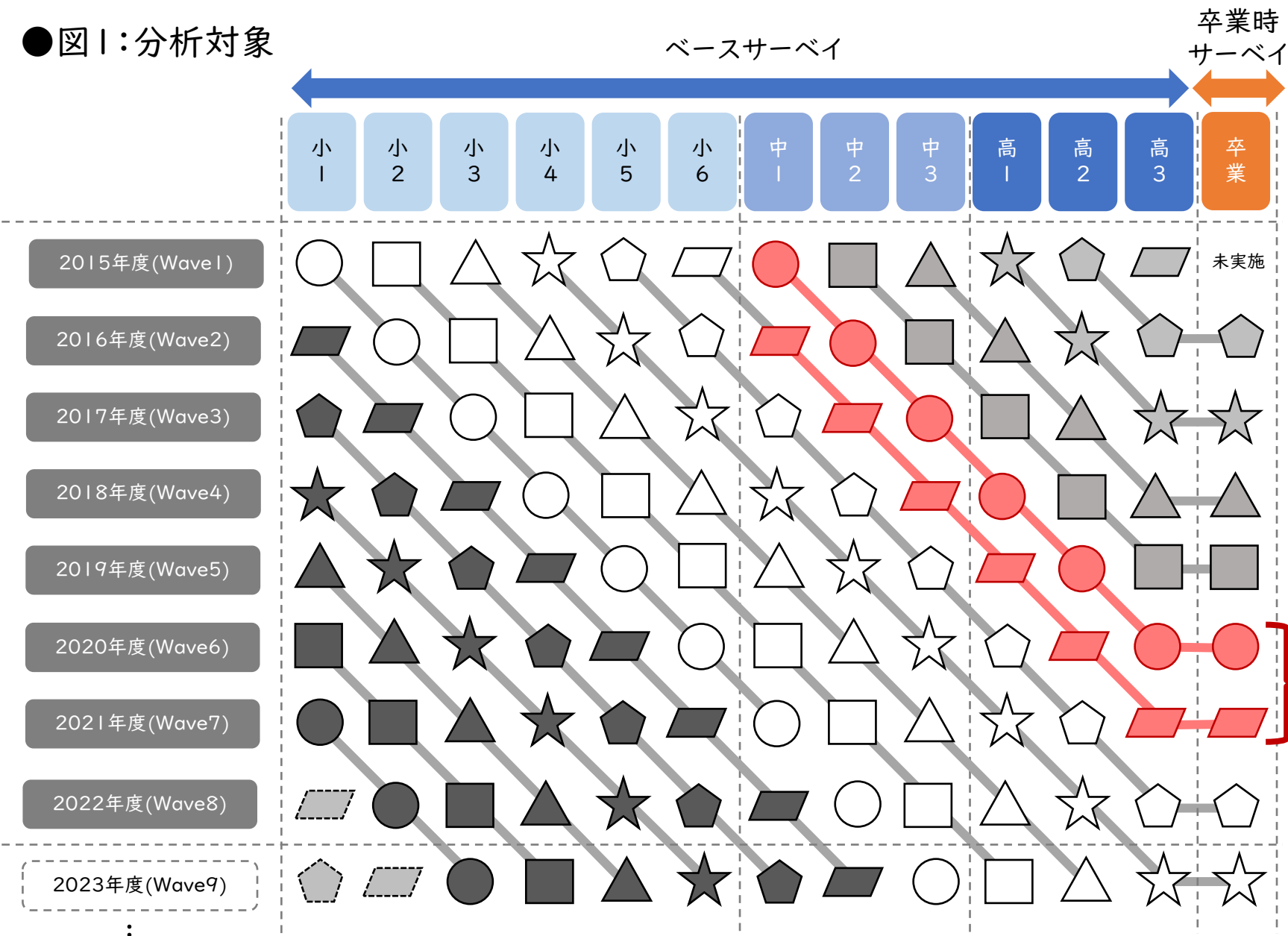
この対象を
分析

※大学進学者数は、短期大学進学者（57名）を含めている。

◆分析対象

【5】

●図1:分析対象



◆分析仮説

【6】

①属性の違い：推薦、総合は、特定の属性に利用されている

- 1) 推薦、総合は、難易度が低い高校、普通科以外の生徒に多く利用されている
→「四大シフト」のルートとして利用されている可能性
- 2) 推薦、総合は、SES(社会経済的地位)の低い家庭の生徒に多く利用されている
→大学進学の新たなルートとして低階層に利用されている可能性

②進路選択プロセス：進路選択プロセスは選抜方法によって異なる

- 1) 推薦、総合による進学者は、学問領域や大学を決定するタイミングが早い
→選抜方法の特性から、進路について明確に意識している可能性
- 2) 推薦、総合による進学者は、選抜方法を決定するタイミングが遅い
→最後まで、一般にするかどうかで悩んでいる可能性

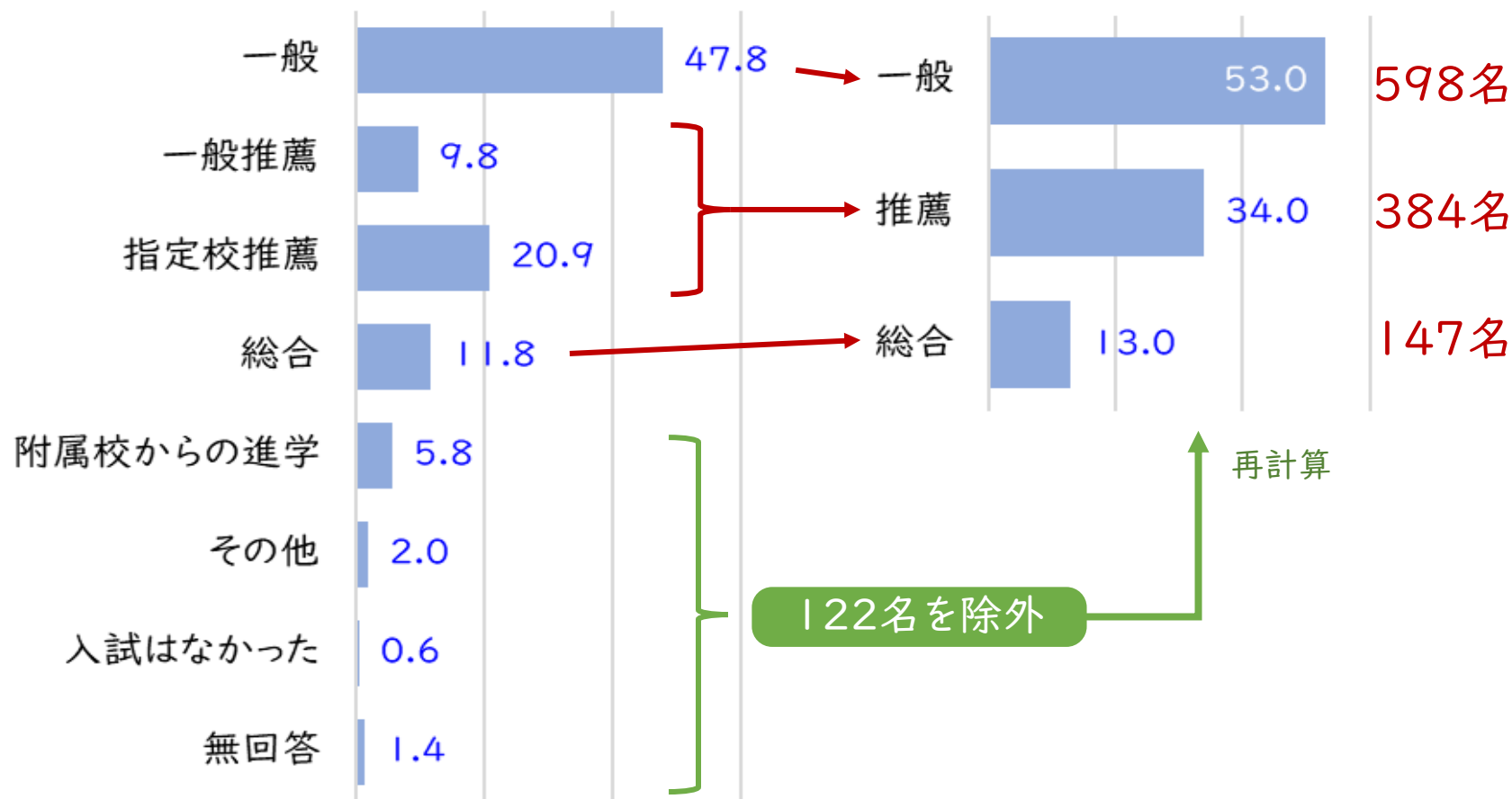
③中学・高校での学習：学習の様子は選抜方法によって異なる

- 1) 推薦、総合による進学者は、高校時代の学習態度がまじめである
→高校時代の活動が評価されることから学習時間などが長い可能性
- 2) 推薦、総合による進学者は、関心・意欲が高い
→多様な資質・能力が評価されることから関心・意欲が高い可能性

◆入学者選抜の状況

●実際の文科省の統計とかなり近い分布であった

●図2:入学者選抜の状況



※サンプルは大学進学者1,251名。「一般」は大学入学共通テスト利用による入学者を含む

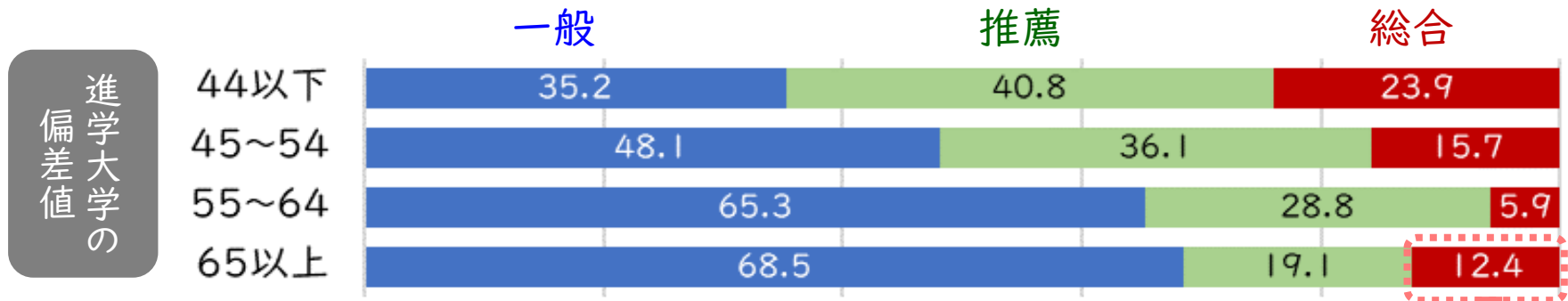
●以下では、一般、推薦、総合の1,129名について分析

◆大学の入学難易度による違い

【8】

●入学難易度が高い大学ほど「一般」が多いが、「総合」も一定の割合存在

●図3:進学大学の入学者選抜(進学大学の偏差値別)

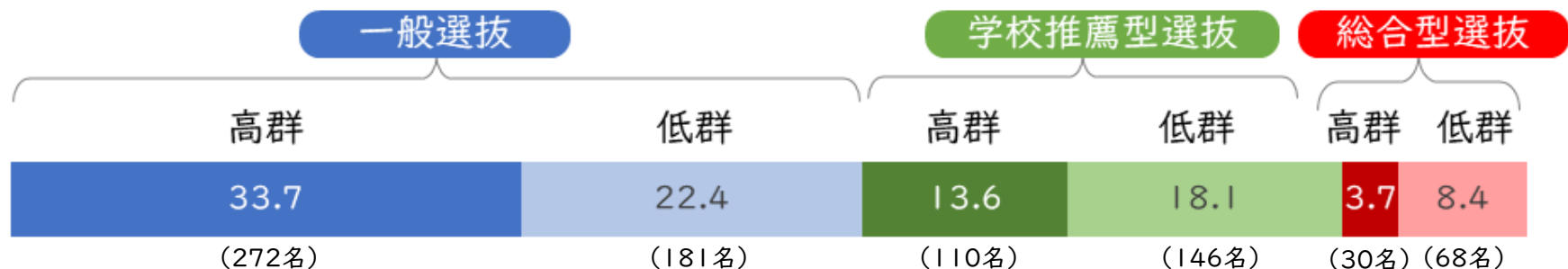


※ $p < 0.001$ (χ^2 乗検定)

※進学大学の偏差値は、回答者の自己申告による。「大学の入試難易度」についての質問に対して、①「おおむね偏差値44以下」、②「おおむね偏差値45~54」、③「おおむね偏差値55~64」、④「おおむね偏差値65以上」、⑤「わからない」から選んでもらった。①71名、②324名、③323名、④89名、⑤127名、無回答195名。

文科省の方針を受けて、国立大学や難関大学での総合型選抜が増えていると考えられる

●図4:進学大学の入学者選抜(全体の分布)



※高群は「おおむね偏差値55~64」と「おおむね偏差値65以上」の合計、低群は「おおむね偏差値44以下」と「おおむね偏差値45~54」の合計。

●全体では「一般・高群」が最も多く、「総合・高群」が最も少ない

◆属性の違い①：出身高校

【9】

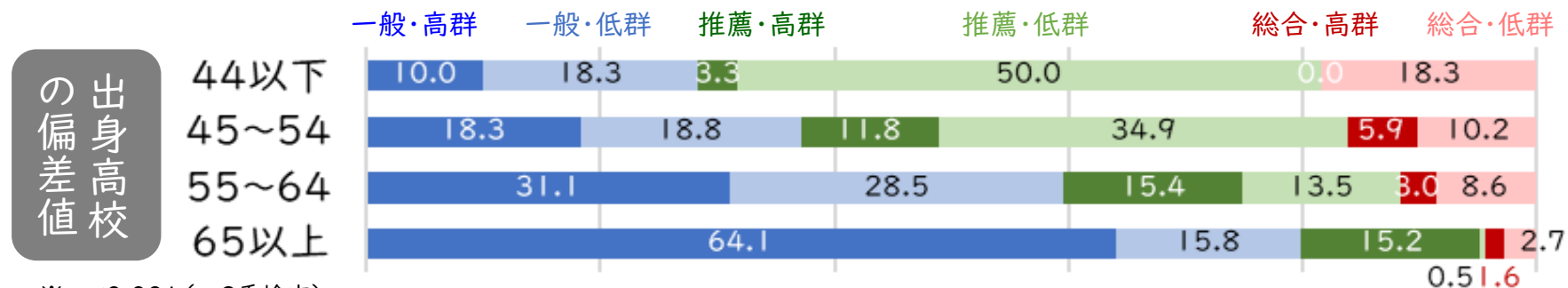
●最初に、「①属性の違い」→出身高校による違いについて検討

1) 推薦、総合は、難易度が低い高校、普通科以外の生徒に多く利用されている
→「四大シフト」のルートとして利用されている可能性

部分採択

偏差値○、学科×

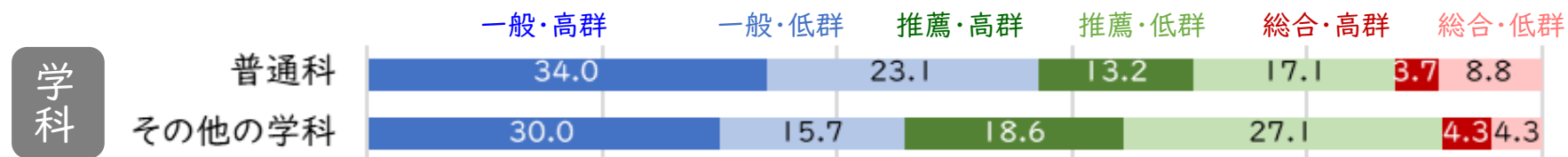
●図5：進学大学の入学者選抜（出身高校の偏差値別）



※ $p < 0.001$ (χ^2 乗検定)

※出身高校の偏差値は、高校名・学科から判明した偏差値をインターネットで公開されている情報をもとに割り当てた。割り当て方については、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所(2020)を参照。「44以下」60名、「45~54」186名、「55~64」267名、「65以上」184名。

●図6：進学大学の入学者選抜（出身高校の学科別）



※*n.s.*

※「その他の学科」は工業科、商業科、総合科、その他のいずれかを選択したもの。「普通科」735名、「その他の学科」70名。

●難易度が低い高校の生徒ほど推薦、総合で大学に進学

◆属性の違い②：SES

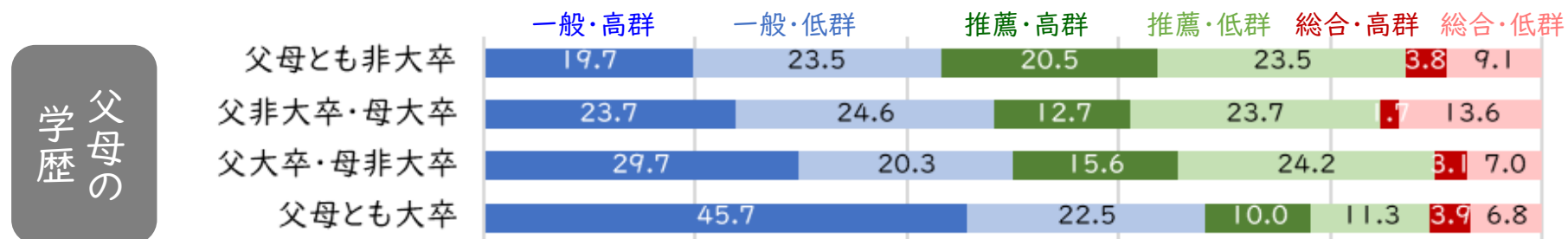
●続いて、「①属性の違い」→SESによる違いについて検討

2) 推薦、総合は、SES(社会経済的地位)の低い家庭の生徒に多く利用されている
→大学進学の新ルートとして低階層に利用されている可能性

部分採択

学歴○、年収△

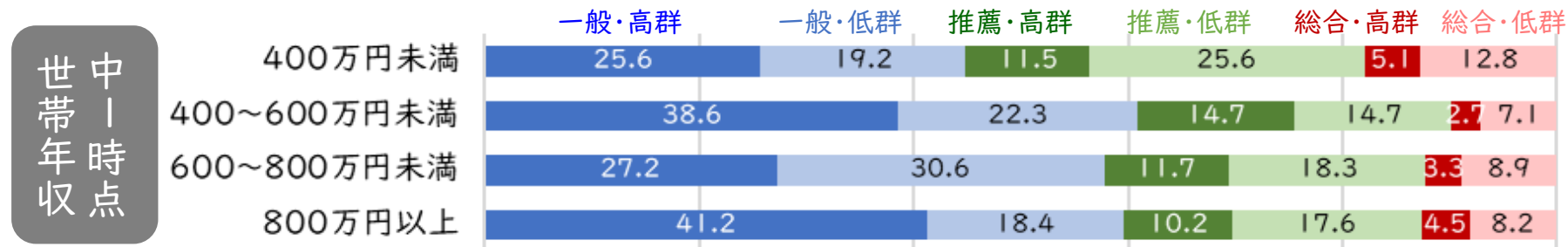
●図7:進学大学の入学者選抜(父母学歴別)



※ $p < 0.001$ (χ^2 乗検定)

※「父母とも非大卒」132名、「父非大卒・母大卒」118名、「父大卒・母非大卒」128名、「父母とも大卒」311名。

●図8:進学大学の入学者選抜(中1時点の世帯年収別)



※ $p < 0.1$ (χ^2 乗検定)

※「400万円未満」78名、「400~600万円未満」184名、「600~800万円未満」180名、「800万円以上」245名。

●父母学歴非大卒の生徒ほど推薦、総合で大学に進学。年収差は小さい
→推薦、総合はSES低層が高群(難関大)に進学するルートになっている可能性も

◆属性の違い③：多変量解析

●誰が推薦、総合を利用しているのか多項ロジスティック回帰分析を実施

●表2:進学大学の入学者選抜を規定する要因分析(多項ロジスティック回帰分析)

		B	有意確率	Exp(B)
推薦	切片	6.537	0.000	
	高校偏差値(単位=10)	-1.058	0.000***	0.347
	普通科(ダミー)	-0.648	0.031*	0.523
	父大卒(ダミー)	-0.445	0.021*	0.641
	母大卒(ダミー)	-0.375	0.049*	0.688
	世帯年収(単位=100万円)	0.015	0.612	1.015
総合	切片	5.839	0.000	
	高校偏差値(単位=10)	-1.164	0.000***	0.312
	普通科(ダミー)	-0.139	0.751	0.871
	父大卒(ダミー)	-0.554	0.038*	0.575
	母大卒(ダミー)	0.109	0.686	1.116
	世帯年収(単位=100万円)	-0.054	0.229	0.948

難易度が低い高校の生徒、
普通科以外の生徒、
父・母が非大卒の生徒
が推薦を選択

難易度が低い高校の生徒、
父が非大卒の生徒
が総合を選択

参照カテゴリ=一般

※Nagelkerke 疑似R2乗値=0.260

※独立変数:出身高校の偏差値(10刻み)、学科(普通科=1、その他=0)、父学歴(大卒=1、非大卒=0)、母学歴(大卒=1、非大卒=0)、中1時点の世帯年収(100万円刻み)

※従属変数:進学大学の入学者選抜

●難易度が低い高校の生徒、父が非大卒の生徒は、推薦、総合を選択

→選抜方法の多様化は「四大シフト」をもたらすマス選抜の性格を持つ

→ただし、世帯年収の効果は見られない

◆進路選択プロセス①：大卒希望

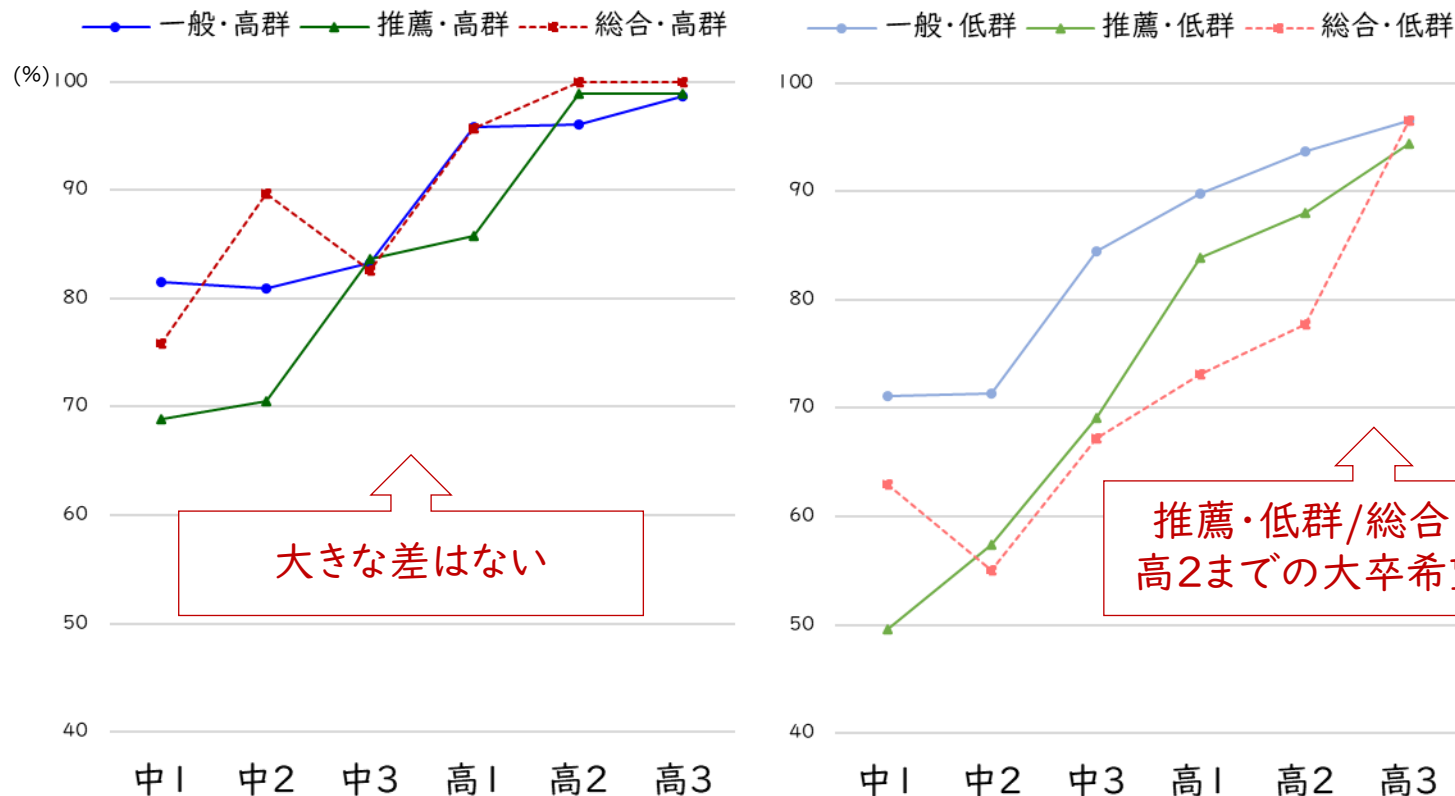
●次に、「②進路選択プロセス」→「大卒希望」について検討

1) 推薦、総合による進学者は、学問領域や大学を決定するタイミングが早い
→選抜方法の特性から、進路について明確に意識している可能性

部分採択

推薦×、総合△

●図9:希望する進学段階:大卒以上の比率



大きな差はない

推薦・低群/総合・低群は
高2までの大卒希望が低い

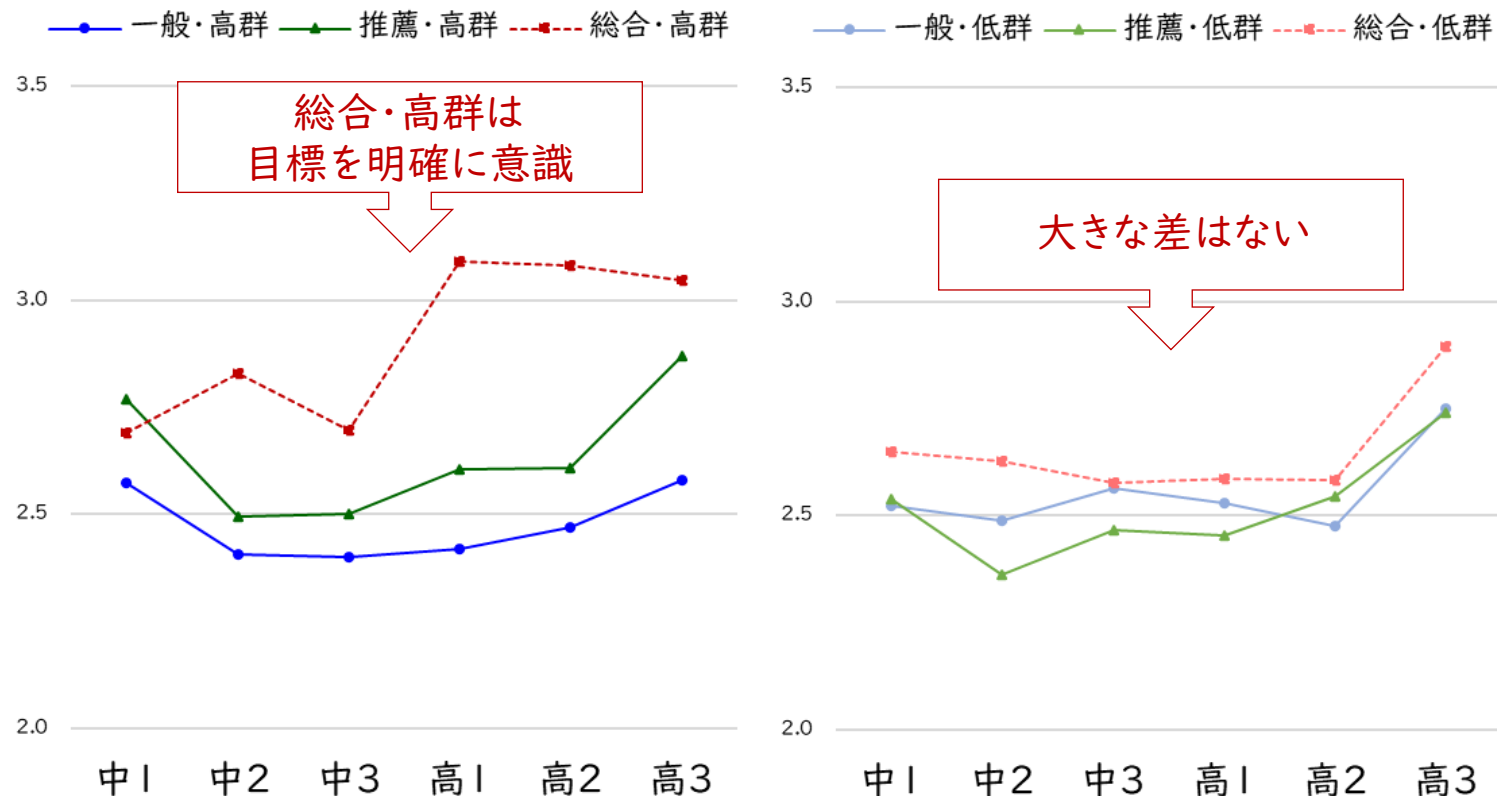
※希望する進学段階について、「短期大学」「四年制大学」「大学院」のいずれかを選んだ比率(%)

●高群は選抜方法による違いはないが、低群は推薦、総合で大卒希望が低い

◆進路選択プロセス②：目標の明確さ

●続いて、「②進路選択プロセス」→「目標の明確さ」を確認

●図10:目標の明確さ



※数値は、「将来の目標がはっきりしている」に対して、「とてもあてはまる」4、「まああてはまる」3、「あまりあてはまらない」2、「まったくあてはまらない」1として群ごとに平均値を算出した結果。

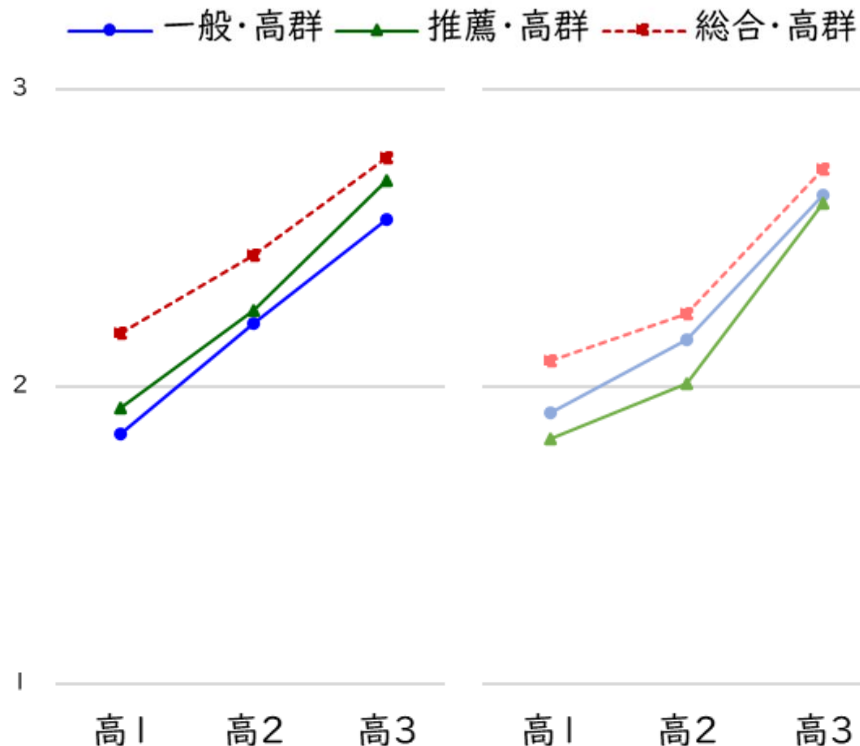
●総合・高群は早い段階から明確な目標を持っているものが多い

◆進路選択プロセス③：専攻/大学選択

【14】

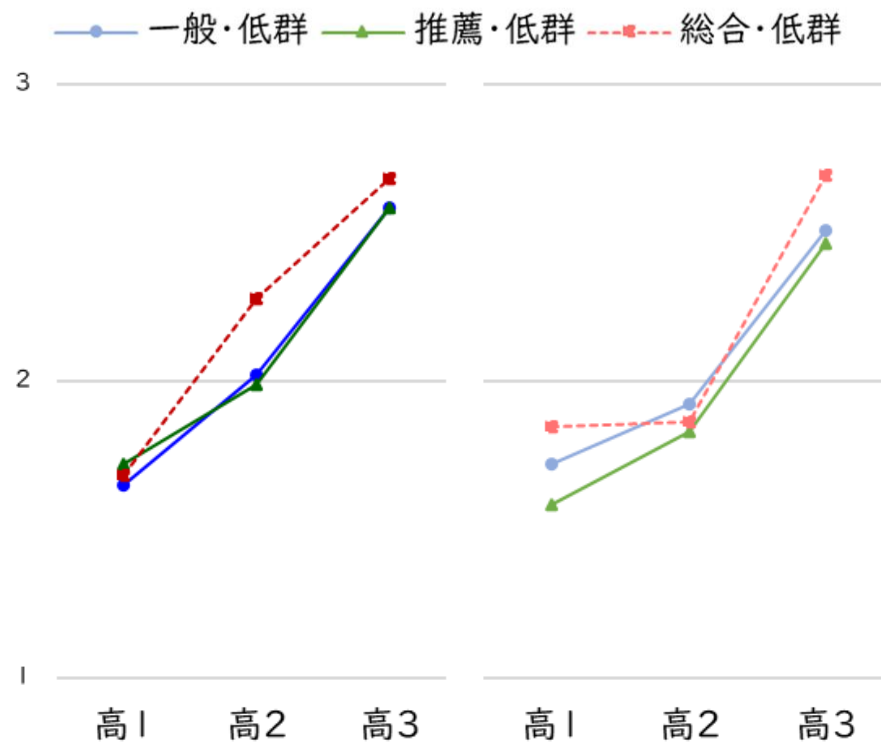
● 「②進路選択プロセス」 → 「専攻分野」「第一志望の学校」の決定を確認

● 図11：専攻分野の決定



※調査は高校生のみ。数値は、「専攻分野」について、「はっきり決めている」3、「だいたい決めている」2、「まだ決めていない」1として群ごとに平均値を算出した結果。

● 図12：第一志望の学校の決定



※調査は高校生のみ。数値は、「第一志望の学校」について、「はっきり決めている」3、「だいたい決めている」2、「まだ決めていない」1として群ごとに平均値を算出した結果。

● 総合は低群・高群を問わず「専攻分野」「第一志望の学校」が明確な傾向

◆進路選択プロセス④：選抜方法

● 「②進路選択プロセス」→希望する「選抜方法」を確認

2)推薦、総合による進学者は、選抜方法を決定するタイミングが遅い
→最後まで、一般にするかどうかで悩んでいる可能性

採択

●表3:希望する選抜方法

		一般・高群	一般・低群	推薦・高群	推薦・低群	総合・高群	総合・低群	合計
高1	一般	61.4	55.2	33.3	20.0	40.9	23.9	44.7
	推薦	6.8	5.2	21.4	28.7	13.6	21.7	14.0
	総合型選抜	0.5	2.2	1.2	2.6	13.6	4.3	2.1
	まだ決めていない	30.9	36.6	41.7	48.7	31.8	50.0	38.5
	入試はない	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
	無回答・不明	0.0	0.7	2.4	0.0	0.0	0.0	0.5
高2	一般	79.2	65.9	37.0	20.2	36.0	19.6	53.1
	推薦	4.6	6.7	29.3	31.1	20.0	28.3	16.0
	総合型選抜	1.9	2.2	4.3	7.6	28.0	17.4	5.5
	まだ決めていない	13.4	23.0	26.1	37.0	16.0	32.6	23.2
	入試はない	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
	無回答・不明	0.5	2.2	3.3	4.2	0.0	2.2	2.1
高3	一般	87.9	81.4	25.0	13.1	27.3	12.5	55.3
	推薦	5.4	7.9	59.8	65.6	4.5	17.9	25.8
	総合型選抜	2.7	5.0	4.3	4.9	59.1	62.5	10.8
	まだ決めていない	0.4	0.7	2.2	0.8	0.0	1.8	0.9
	入試はない	2.2	4.3	6.5	15.6	9.1	5.4	6.3
	無回答・不明	1.3	0.7	2.2	0.0	0.0	0.0	0.9

※調査は高校生のみのみ。網掛け箇所は、選抜方法の希望と実際の選抜方法が一致する箇所。

●推薦、総合は、高3段階で選抜方法が確定する生徒が多い

◆中学・高校での学び①：学習時間

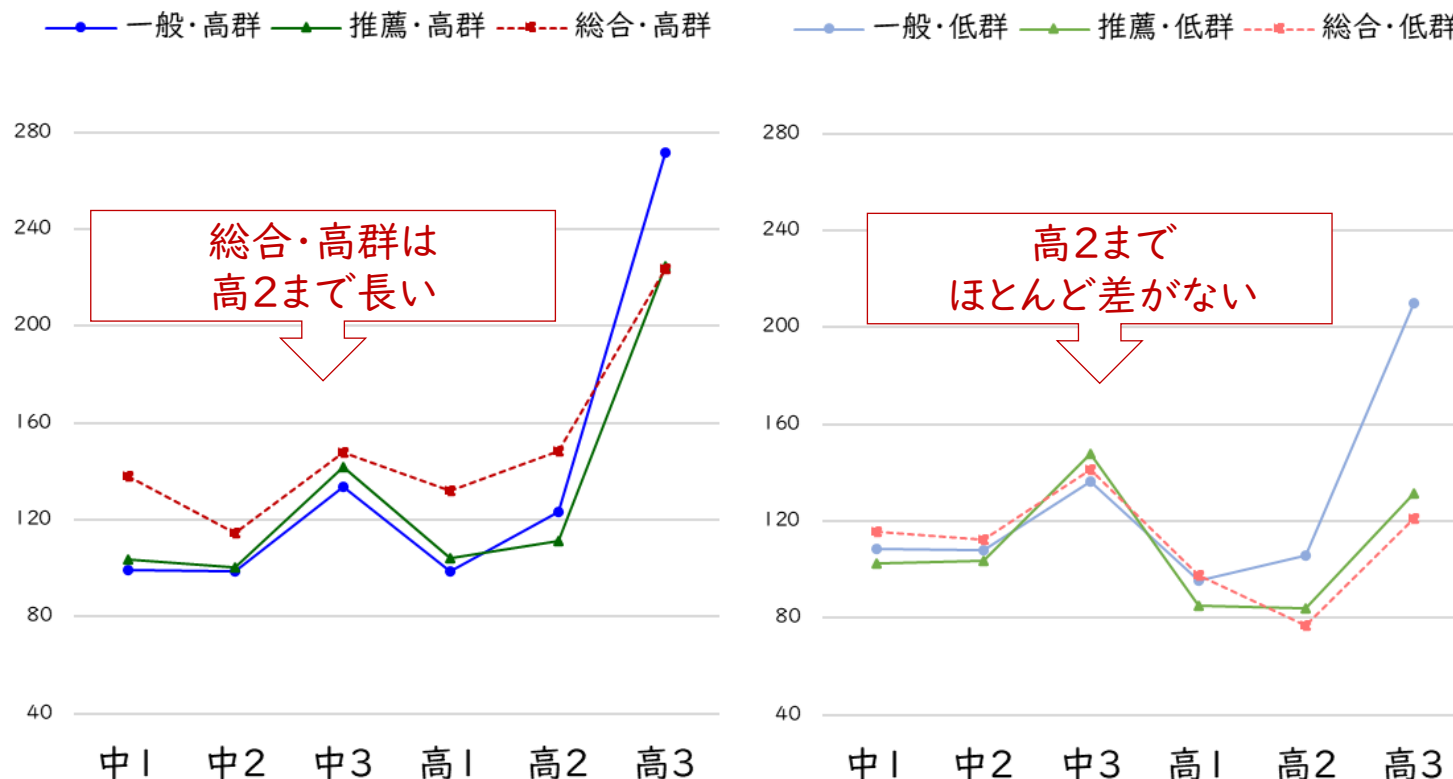
●最後に、「③中学・高校での学び」→「学習時間」の推移を分析

- 1) 推薦、総合による進学者は、高校時代の学習態度がまじめである
→高校時代の活動が評価されることから学習時間などが長い可能性

部分採択

推薦×、総合△

●図13:学習時間



※数値は学習時間(宿題、家庭学習、学習塾の合計)の平均。スケールでたずねた時間を数値に換算して算出した。

●一般は高3で長い。総合・高群は高2まで長い、総合・低群は差がない

◆中学・高校での学び②：学習意欲

● 「③中学・高校での学び」 → 「学習意欲」の推移を分析

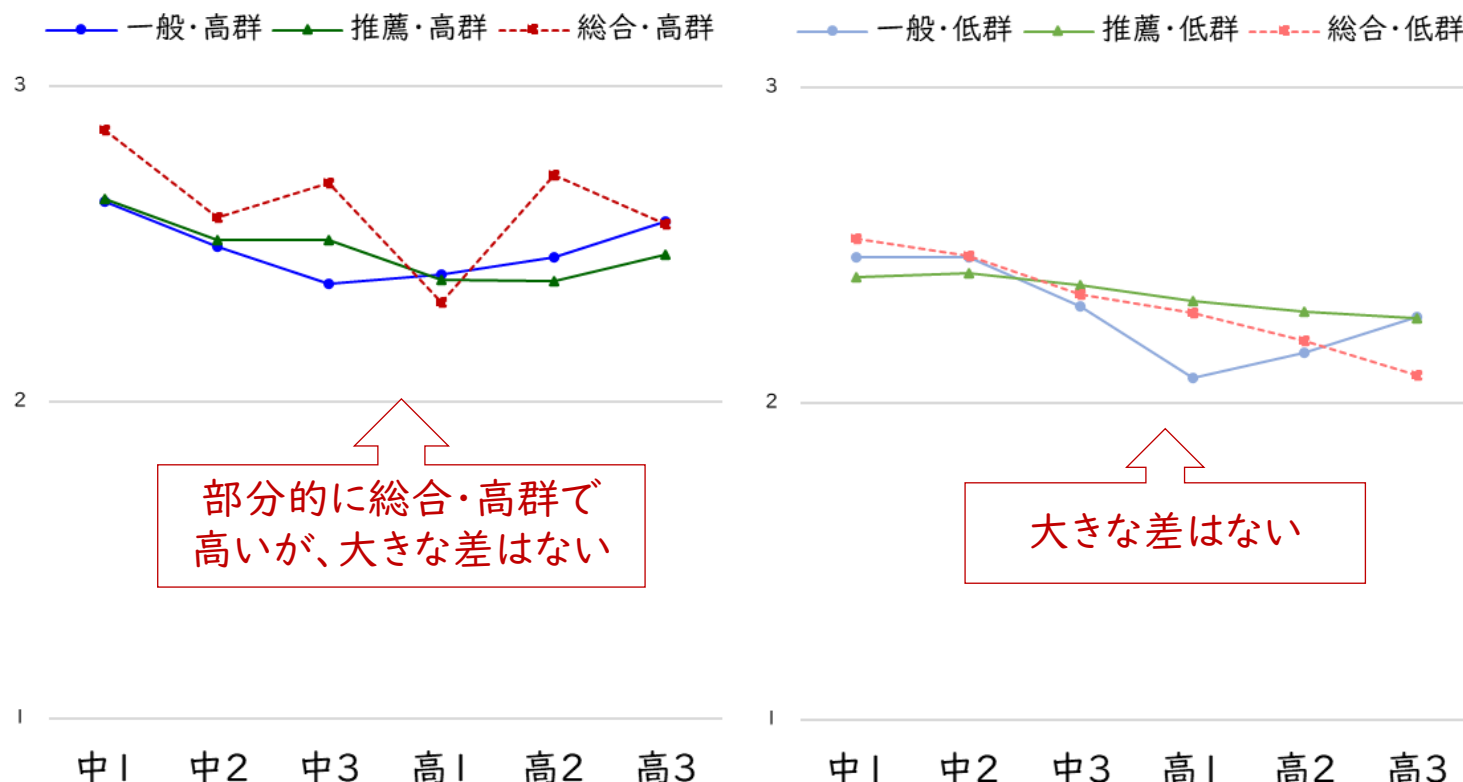
2) 推薦、総合による進学者は、関心・意欲が高い

→ 多様な資質・能力が評価されることから関心・意欲が高い可能性

部分採択

推薦×、総合△

● 図14: 学習意欲

部分的に総合・高群で
高いが、大きな差はない

大きな差はない

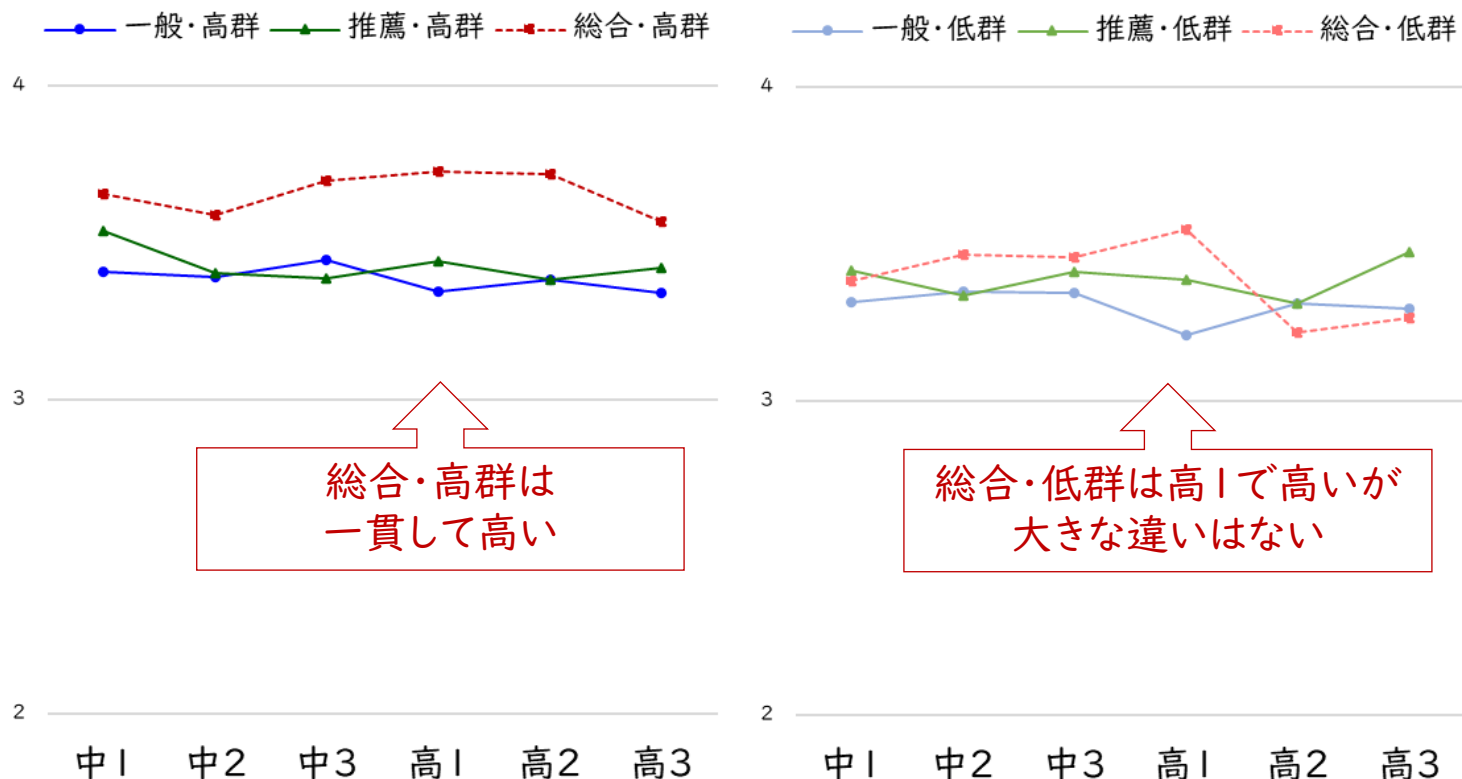
※数値は、「勉強する気持ちがわからない」に対して、「とてもあてはまる」1、「まああてはまる」2、「あまりあてはまらない」3、「まったくあてはまらない」4として群ごとに平均値を算出した結果。

● 学習意欲については、全体に大きな差は見られない

◆中学・高校での学び③：興味に打ち込む

● 「③中学・高校での学び」 → 「興味に打ち込む」について確認

● 図15:興味に打ち込む



総合・高群は一貫して高い

総合・低群は高1で高いが大きな違いはない

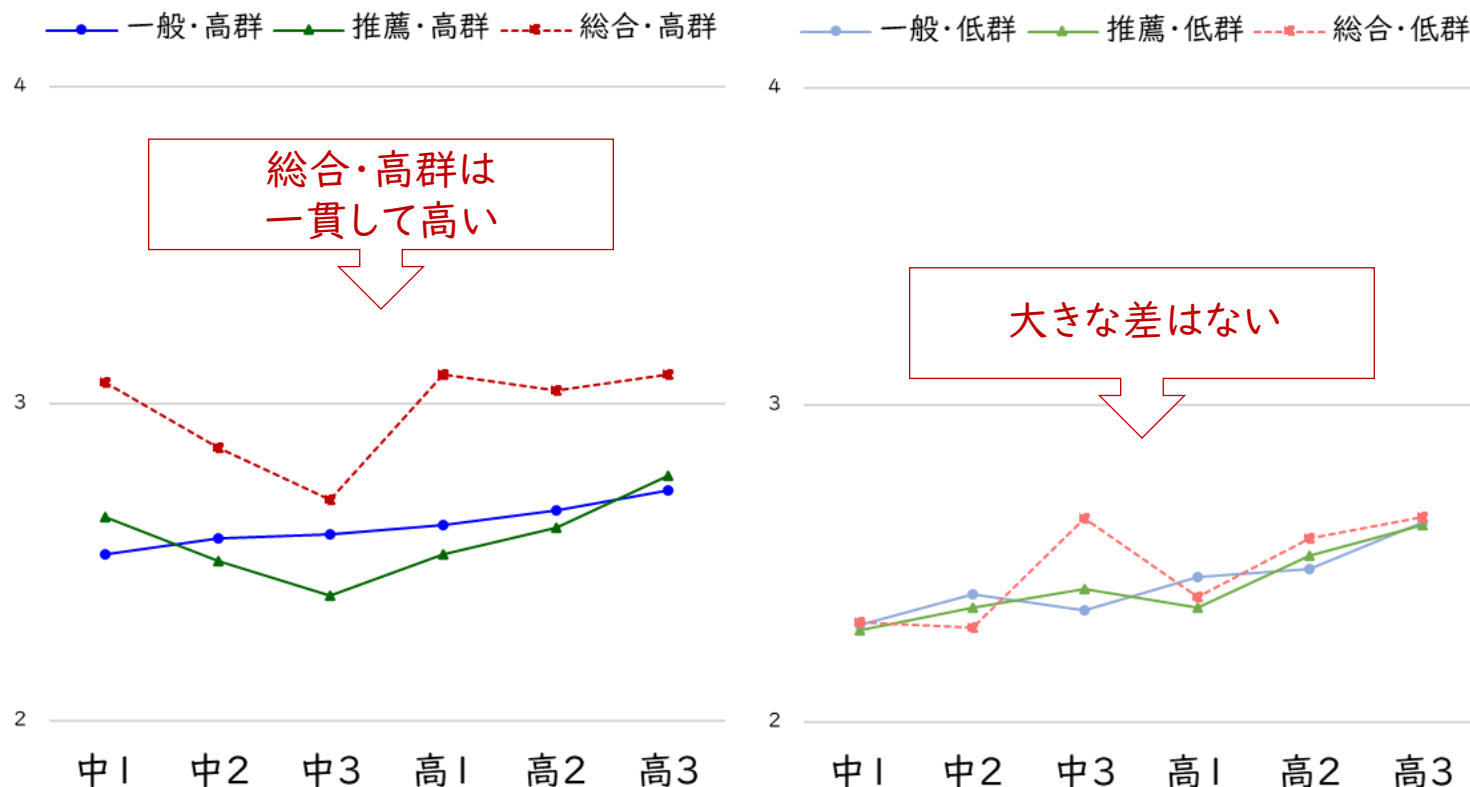
※数値は、「興味を持ったことに打ち込む」に対して、「とてもあてはまる」4、「まああてはまる」3、「あまりあてはまらない」2、「まったくあてはまらない」1として群ごとに平均値を算出した結果。

● 総合・高群は中1時点から一貫して「興味を持ったことに打ち込む」傾向。
推薦と一般は類似

◆中学・高校での学び④：社会関心

● 「③中学・高校での学び」 → 「社会関心」について確認

● 図16:社会関心



※数値は、「社会の出来事やニュースに関心が強い」に対して、「とてもあてはまる」4、「まああてはまる」3、「あまりあてはまらない」2、「まったくあてはまらない」1として群ごとに平均値を算出した結果。

● 総合・高群は中1時点から一貫して「社会への関心が高い」傾向。
推薦と一般は類似。

◆結果のまとめ

【20】

①属性の違い：推薦、総合は、特定の属性に利用されている

- 1) 推薦、総合は、難易度が低い高校の生徒、SESが低い家庭の生徒などに多く利用され、従来は非進学だった層が大学に進学する際のルートになっている。マス選抜の機能を有していると考えられる。★中村(1996,2010)の知見と一致
- 2) SES低層が一般で高群(難関大)に進学するのは難しいが、推薦、総合はそのような層が高群に進学するルートになっている可能性も？

②進路選択プロセス：進路選択プロセスは選抜方法によって異なる

- 1) 総合・高群は、目標が明確で専攻分野や第一志望の学校の決定が早い傾向が見られるが、それ以外の群は大きな違いが見られない。
- 2) 一般は高1段階から一般選抜を希望している生徒が多く、希望と実際の一致度が高い。これに対して、推薦、総合は、高3段階で選抜方法を決定する生徒が多い。

③中学・高校での学習：学習の様子は選抜方法によって異なる

- 1) 総合・高群は、高2までの学習時間が長く、「興味に打ち込む」「社会に関心」などの傾向も見られる。積極的に学んできた生徒だと考えられる。★木村(2020b)の知見と一致
- 2) それ以外の群については、一般で高3の学習時間が長いほかは選抜方法による違いが小さい。推薦は一般との類似点も多く、特定の生徒が選抜されているように見えない。

◆考察

【21】

●研究の目的（再掲）

大学入学者選抜方法と中学・高校時代の学びの関連を明らかにすることで、**入試改革が企図した効果を得られているか**を検討する。

●考察

総合型選抜は、入学難易度の高い大学群では一般選抜や学校推薦型選抜と比べても、自分の目標が明確で、中学時代から積極的に学習し、社会に対する関心が高い学生を選抜することに成功しているように見える。この点では、入試改革が企図した成果が得られている。しかし、その**成果は、入学難易度の低い大学には及んでいない**。また、学校推薦型選抜はその在り方が多様なためか、目立った特徴が表れていない。結局、**難関大学は、一般選抜で従来の学力に優れた学生を、総合型選抜で多様な資質・能力をもつ学生を獲得するという「独り勝ち」の状況を生んでいる**。学校推薦型選抜や総合型選抜が、入学が容易な選抜方法というマス選抜の機能を脱却し、従来と異なる資質・能力を測りうるものになるのかどうか。継続した観察が必要だと考える。

◆研究上の課題

【22】

①結果の安定性の問題

今回の分析は2ラインのコホートを合算して分析したが、選抜方法を分けて分析する際に、大学の難易度が変数として得られているケースなどに絞るとサンプルが少なくなり、安定した結果が得られないことがあった。調査は継続して実施されているので、今後は合算するコホートを増やすなどして、安定した結果が得られるように配慮する必要がある。

②個人の変化プロセスを検討する必要

今回の分析では、集団の学年変化を検討したが、パネル調査の特徴を生かした個人の変化プロセスを検討する必要があると考える。希望する選抜方法が一貫しているケースと紆余曲折しているケースの違いなど。

③時代の変化を検討する必要

今回の分析では時代の変化を検討していないが、入試改革が企図した成果を得られているのかどうかは、時代による違いについても検討する必要がある。調査は継続される予定なので、今後は異なるコホート間での比較なども求められる。

★より詳細な分析を行い、それぞれの選抜方法の成果と課題を継続して検討するのが今後の課題である。

◆参考文献①

【23】

- 片瀬一男（2020）「AO入試再訪：10年の後に」『東北学院大学教育研究所報告集』20，5－34.
- 加藤一晃（2019）「推薦・AO入試希望者における高大接続上の課題—学校外学習時間の規定要因分析から」『日本高校教育学会年報』26，52－61.
- 木村治生（2020a）「特色あるAO入試の成果と課題に関する検討—追手門学院大学アサーティブプログラム・アサーティブ入試を事例に」『アサーティブ学習高大接続研究』3，2－14.
- 木村治生（2020b）「入学者選抜と大学入学前後の学びの関連の検討—推薦入試・AO入試に注目して」『大学教育学会誌』42(2)，29－38.
- 木村治生（2021）「推薦入試・AO入試の効果に関するレビュー研究—『個別大学の追跡調査』と『複数高校・大学を対象とした調査』の結果に注目して」『大学入試研究ジャーナル』31，167－174.
- 木村拓也・田尾周一郎・林篤裕・副島雄児（2018）「総合的且つ多面的な評価に基づく入学者選抜とその学修成果の可視化—九州大学21世紀プログラムの事例」『名古屋高等教育研究』18，177－198.
- 倉元直樹・大津起夫（2011）「追跡調査に基づく東北大学AO入試の評価」『大学入試研究ジャーナル』21，39－48.
- 楠見孝・南部広孝・西岡加名恵・山田剛史・斎藤有吾（2016）「パフォーマンス評価を活かした高大接続のための入試—京都大学教育学部における特色入試の取り組み」『京都大学高等教育研究』22，55－66.
- 森川修・山田貴光・小山直樹・清水克哉（2014）「鳥取大学のAO入試実施10年間を振り返って」『大学入試研究ジャーナル』24，237－242.
- 中村高康（1996）「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立—公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐる」『教育社会学研究』59，145－165.
- 中村高康（2010）「四大シフト現象の分析」，中村高康（編著）『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの質的・量的アプローチ』ミネルヴァ書房，163－183.
- 中室牧子・藤原夏希・井口俊太郎（2014）「『AO入試』の再評価：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）を事例に」『Keio SFC journal』14(1)，178－197.

◆参考文献②

【24】

- 西丸良一（2015）「誰が推薦入試を利用するか—高校生の進学理由に注目して」，中澤渉・藤原翔（編著）『格差社会の中の高校生』勁草書房，68-80.
- 中西啓喜（2017）「国立大学は推薦・AO入試によって『成績優秀な学生』を獲得できているのか？—エリートセクターにおけるマス選抜の導入」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』24，63-74.
- 坂本尚志（2014）「医学部医学科におけるAO入試および地域枠入試の導入とその結果」『大学入試研究ジャーナル』24，201-206.
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（2020）『子どもの学びと成長を負う—2万組の親子パネル調査から』勁草書房.
- 山村滋・濱中淳子・立脇洋介（2019）『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか—首都圏10校パネル調査による実証分析』ミネルヴァ書房.



ご清聴いただき
ありがとうございました